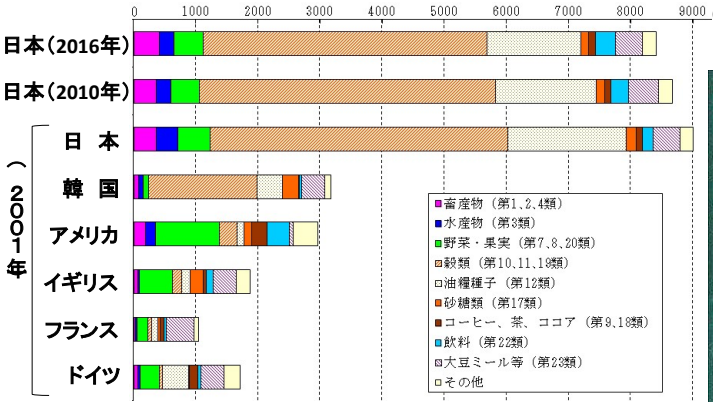
中田哲也【ご挨拶・自己紹介】

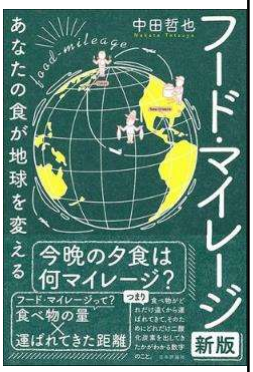
1960年徳島市生。岡山大・農学部卒、千葉大・大学院修了(博士・農学)。

2001～3年、農林水産政策研究所においてフード・マイレージを研究。現在、農林水産省統計部勤務（再任用）。



輸入食料のフード・マイレージ＝輸送量×輸送距離

輸送の過程で1,700万トンの二酸化炭素を排出（試算）



日本評論社（2018.1）

ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」 https://food-mileage.jp/

様々な勉強会やセミナー、福島へのスタディツアー等に参加する中で、大江さんから多くの学びを頂きました。

大江正章（おおえ ただあき）さん

1957年生まれ。早稲田大・政治経済学部卒。
学陽書房を経て1996年に出版社コモンズを創設。

環境、農、食などをテーマに多くの質の高い本を出版。
自らもジャーナリスト・ライターとして、農業、地域づくり等について、多くの取材・執筆。

アジア太平洋資料センター（PARC）共同代表、全国有機農業推進協議会理事、コミュニティスクールまちデザイン理事、「平和の棚の会」呼びかけ人等。

「平和の棚の会」イベントにて
（2018.10/4、東京・神保町）

2020年12月15日（火）、肺がんのため逝去（63歳）

私事で恐縮ですが・・・

CSまちデザイン主催
ふくしま浜通りを訪ねる
スタディツアー
2018.11/3～4、いわき市

ローカルアクティビスト
・小松理虔さん
インタビュー

福島大・林 薫平先生による講座

ふくしまオーガニックコットン事務所

CSまちデザイン主催
ふくしま浜通りを訪ねる
スタディツアー
2016.11/5～6

南相馬市小高区

新地町のりんご農家

南相馬市の市民放射能測定センター

「油菜ちゃん」

CSまちデザイン主催
市民講座

2019.2/9（土）「福島の漁業は今」
福島大・林 薫平先生

2017.3/22（土）「都市だから農業！」
白石好孝さん（農業）、
榊田みどりさん（農業ジャーナリスト）と

様々なシンポジウム、
セミナー等を主催、
自らも登壇

「幸せな暮らしと怠ける権利」トークセッション
（2018.10/2（火）、東京・神田駿河台）

中野佳裕先生『カタツムリの知恵と脱成長』
出版記念エキシビション
（2018.12/24（土）、東京・三鷹）

「有機農業で生きる」トークセッション
金子美登さん（埼玉・小川町）と
（2013.2/2（土）、東京・渋谷）

2016.11/5（土）、相馬市松川浦

2017.11/11（土） 福島・二本松市

ふくしまオルガン堂
2013.6/29（土）、東京・世田谷区

コモンズ忘年会
2017.12/26（土）、東京・練馬区

大江正章さん著
『有機農業のチカラ―コロナ時代を生きる知恵』

（2020年10月30日、コモンズ）

http://www.commonsonline.co.jp/new_books/2020/09/04/yukinogyopower/

まえがき
プロローグ　有機農業的感性と田園回帰
Ⅰ　食・農・地域を守る思想
Ⅱ　学校給食と有機農業と地域づくり
Ⅲ　地域に広がる有機農業
Ⅳ　田園回帰と有機農業
Ⅴ　東日本大震災から考える
Ⅵ　協同組合と都市農業
Ⅶ　自治体職員・首長へのメッセージ
エピローグ　高松さんと明峯さんと、ぼくの活動
あとがき

コロナ時代を生きる知恵、コロナ禍に打ち勝つ道
【まえがき、p.3～】

○　コロナ時代（コロナ禍、コロナ危機）
：　大量生産・大量消費・大量廃棄を前提とする異常な産業社会・新自由主義経済が招いた当然の帰結。
　便利で快適な暮らし（都市集中社会）の脆弱さ。

○　カネはなくてもモノと人間関係があれば生きていける。

○　見直すべきこと
⇒　脆弱な都市型社会と過剰な便利さの追求
（経済成長ばかりを追い求めない）
○　取り入れるべきこと
⇒　第一次産業の重視とさまざまなレベルにおける食の自給。

○　何より求められるのは、持続可能な社会を作る有機農業。

有機農業の定義【p.11～】

○ **有機農業の推進に関する法律（平成18年法律第112号）**

「化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行われる農業」

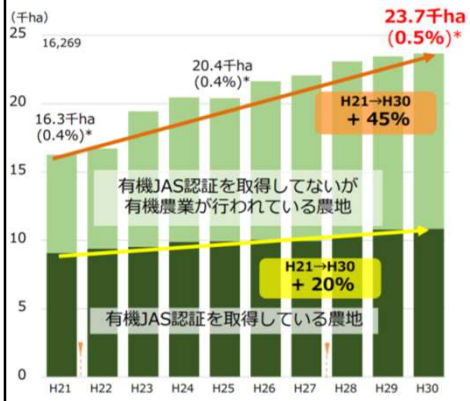
○ **有機農産物の日本農林規格（JAS）（平成17年農林水産省告示）**

- は種又は植付け前2年以上化学肥料や化学合成農薬を不使用
- 組換えDNA技術の利用や放射線照射を行わない
- 周辺から使用禁止資材が飛来し又は流入しないように必要な措置

⇒（大江さん）
単に農薬と化学肥料を使わない特別な農業ではない。
「もう一つの農業」ではなく「本来の農業」
・自然との共生。技術である前に心、暮らし方。（中島紀一氏）

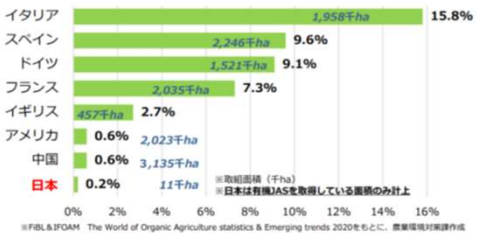
日本の有機農業の現在【p.16～】

日本の有機農業の取組面積



*（ ）内の数字は各年度における我が国の耕地面積に占める有機農業取組面積の割合。

有機農業取組面積の割合（2018年）



注：有機JASを取得していない面積を含めると0.5%程度

新規参入者の有機農業志向
：3割近くが有機農業に取り組み。

（⇒大江さん）
彼ら・彼女らの多くは「儲かる農業」ではなく「納得できる仕事と生き方」を求めている。

出所：農林水産省「有機農業をめぐる事情」（2020.9）
https://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/yuuki/attach/pdf/meguji-full.pdf

有機農業的感性（センス）【p.25～】

○ 本来、「有機的」とは
多くの部分が集まって全体を構成し、各部分が密接に結びついて影響を及ぼし合う状態。良い関係性をつくるということ。

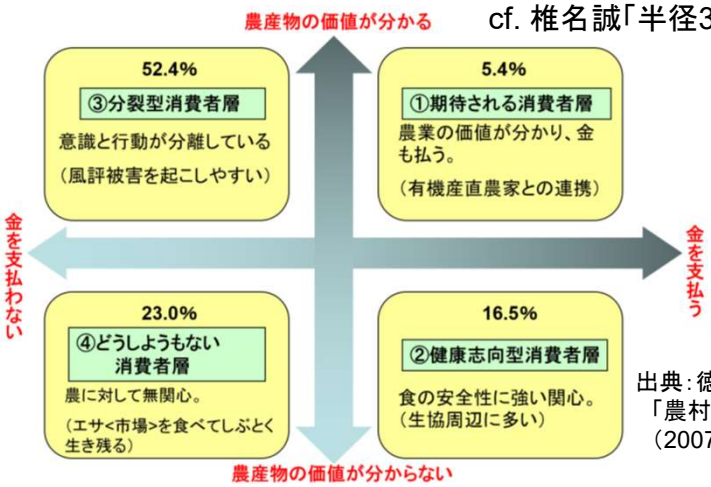
○ 道筋や手段が異なっていても、その違いを認め、少しの違いを批判（非難）しないこと。⇐「有機的感性」

（日本の有機農業関係者は、えてして苦手だった。若い世代は違う。）

○ 40歳代になって再び社会運動に関わるように。【p.249～】
強く意識しているのは、
1 言葉だけで過激にならず、分かりやすく。
2 色んな考えの人たちがいて当然。
3 たくさんの人を仲間に。

半径3メートルの安全性【p.33～】

○ 日本の消費者：安全性への関心は一貫して強い。
自分と家族の安全な食生活と暮らしは守りたい。
○ 一方、安全な食べ物を作る農業・農村を守ろうという意識は高くない。
cf. 椎名誠「半径3メートルの実感」



出典：徳野貞雄
「農村の幸せ都会の幸せ」
（2007、日本放送出版協会）

（⇒大江さん） 食べものにまっとうな対価を。生産者との関係性。

地域に希望あり：歩いて集めた現場の事例（例）

○ 千葉・いすみ市　全量地元有機米の学校給食【p.62～】

○ 島根県 「みんなでつくるしまね有機の郷事業」【p.90～】

○ 埼玉・小川町　新規就農者など多様な広がり【p.108～】

○ 千葉・八郷町　意欲的な農協が始めた新規参入制度【p.189～】

○ 東京・練馬区　地産地消で消費者とつながる都市農業【p.200～】

○ 山形・高畠町　中山間地域で新規就農者が増加【p.228～】

○ 岩手・紫波町、福井・池田町　住民参加で創る公共図書館【p.234～】

市民研 連続講座「日本の市民科学者-その系譜を描く」で私が学んだこと
（高木仁三郎、宇井 純、原田正純ら） ⇒ ***現場が大事***
https://www.shiminkagaku.org/csijseminar_citizenscientists_2020_2021/

この本を創ろうと思った2つの理由【あとがき、p.251～】

① 新型コロナ問題
- 持続可能な社会と食の自給拡大
- 環境を破壊せず、いのちを大切にし、地域を元気にする有機農業

② きわめて個人的な理由
- 3月に生まれて初めて大きな病気。改めていのちの有限性と真剣に向き合った。
- ぼくが発言してきたことの集大成。若い方々にもぜひ読んでほしい。

2020年12月15日（火）
肺がんのため逝去（63歳）

12月19日（土）、東京・上落合でお別れ会
「走り抜けた人生」（お礼状より）

どうやって産地や生産者とつながるの？

https://food-mileage.jp/2021/01/13/seminar/

「あなたの食が地球を変える」

○　右肩上がりで発展してきた人類の文明
（大量生産・大量（長距離）流通・大量消費・大量廃棄）
：　資源制約や地球環境問題に直面。

水野和夫「資本主義の死期が近づいている」

斎藤幸平「資本主義システム自体を変革するしかない」

ラトゥーシュ「持続可能な開発：エコロジカルな偽善者」

ガンディーの言葉「地球はすべての人の必要を満たすのに十分なものを提供するが、すべての人の貪欲を満たすほどのものは提供しない」（石井一也先生のご著書より）

○　食の分野も例外ではない。
しかし、他の分野以上に持続可能性を追求しやすい。
・　一人ひとりが自ら主体的に選択できる余地が大きい。
・　地域の資源や風土と密接に結びついている。

宮台真司「スローフードとは『世直し運動』」

持続可能なライフスタイルを消費者が選択
：消費者の社会的責任

ご清聴ありがとうございました。